

「第二十七回三田文學新人賞 佳作」

退職前夜

小林浮世

淡いグレーのビルが整然と立ち並ぶオフィス街を、くすんだトルコ石のような色をした青空が見下ろしている。雲はなく、快晴。ビルの屋上のアンテナが、日差しを受けてきらついている。この街は真夏なのだろう。

ビルの窓の一つから、ちらちらと白いものがこぼれ落ちていることに気付く。カメラが寄る。窓際で、縮れた黒髪を一つ結びにしたスペイン系の女が、手に持った書類の束を、外に向かって勢いよく投げつけた。書類は虚空で散り散りになり、微風に煽られ、翻りながら宙を舞う。

映像が切り替わる。同じオフィス街の、別の場所のようだ。左右のビルのあちこちの窓から、紙片が、街路樹の植わった大通りへと、季節外れの粉雪のように降り注ぐ。通りには、肩や腿を大胆に露出したラテン系の人々が行き交っている。紙に目もくれずに通り過ぎる会社員らしきグループの後に、物珍しそうにカメラを向ける観光客がちらりと映り込んでいる。アスファルトの上でできたシュレッダー屑の小山めがけて、薄ピ

ンクのノースリーブワンピースを着た小さな女の子がうつ伏せにダイブし、両足をばたばたさせながら笑っている。

「...In Buenos Aires, office workers celebrate the last day of the business year by scattering papers from windows to streets.」

かすかに聞こえてくるナレーションの単語を拾って、頭の中で日本語に置き換える。——ブエノスアイレスでは、会社員たちは、祝う。仕事納めの日。紙を、撒き散らすことによって。窓から、通りに——。

仕事納めって、一二月じゃないのかな。この映像、どう見ても夏……ああそうか。ブエノスアイレスはアルゼンチンの首都だから、南半球。季節が逆転するんだ。理屈では判っていても、映像で見るとどこか冗談めいている。

それにしても。

夏空の下、書類が紙吹雪のように舞う仕事納め、いいな。

あの中を歩いて、ひらひら降り注ぐ書類たちに祝福されたい。舞台の真ん中で拍手と紙吹雪を浴びせてもらえるような人生を歩んでこなかった私でも、あの街のあの景色の中に行くことができれば、少しだけ報われる気がする。

「お先に失礼しますねー」

後ろから声が出て、我に返った。顔を上げた瞬間、パソコンの液晶画面に表示された文字だらけのエクセル表が目飛び込んできて、こめかみに鈍痛が走る。これは……客先に提出する用語集だ。夢に見ていた夏のオフィス街の残像がちらついて、さつきまでやっていた作業を思い出すまでに数秒かかった。

声の方を振り返ると、二カ月ほど前に中途入社した岸本さんが、鮮やかなオレンジの分厚いダウンコートを着込んでいるところだった。歓迎会で、旦那さんと知り合ったきつかけが登山だと話していたのを思い出して、確かにあの格好なら雪山も登れそうだと納得する。女性にしてはがっしりした手がジッパを一着まで引っ張り上げた弾みで、フードに付いたファーがぼんと跳ねる。

「今夜、寒くなるって。佐伯さんも適当なところで切り上げた方がいいよ。明日中にどうしても終わらなそうなお仕事あったら、こっちで引き取るから言ってね」

「あ、はい、ありがとうございます」

「じゃ、鍵、よろしくね」

岸本さんは化粧つきの顔に人の好きそうな笑みを浮かべ、鞆を肩から下げると、私のいるリビングスペースに背を向けて薄暗い玄関へと歩いていった。ドアが開かれた拍子に、廊下の白い蛍光灯がもろに視界に入り、こめかみがまた小さく痛む。

目を瞑った数秒後、かしやんと、ドアの閉まる音がした。私だけになったオフィスに、暖房の唸りだけが小さく響いていた。机に両肘をついて両手で頭を抱え、ゆっくり呼吸をしながら、見えないクリームをみ込むように左右のこめかみをさすった。繰り返しているうちに、痛みの角が少しずつ丸くなる。

椅子からゆっくり立ち上がり、玄関へと向かった。ぽつんと残っている私の黒いフラットパンプスをスリッパ履きにして、白いドアに両手をつき、覗き穴に左目を近付ける。指先に一月の冷気を感じながら、穴の向こうに目を凝らす。レンズ越しに歪んだ廊下の右端で、ずんぐりした

オレンジの人影が、エレベーターに乗り込むのが見えた。多分、引き返してくることはないだろう。

デスクへ戻ろうと後ずさった瞬間、身体がふらついた。月曜から水曜にかけてずっと十時過ぎまで残業だったので、無理もない。変な夢まで見てしまうなんて、多分もう頭が正常に働いていない。

しかし、不思議だ。大学生の頃、英語の講義で見た動画が、いきなり夢に現れるなんて。

働き始めてからは、思い出すこともなかった。気付かないうちに、残像が意識の底に沈んでいたのだろうか。

リビングスペースを振り返る。横に長いベランダの向こうにはビル群が広がり、アオヤマの街が放つ光の粒が眼下に瞬いている。

窓際まで歩いて、道路を縦横に走ってゆく車のライトや、「PORS  
CHE」「LEXUS」「SWAROVSKI」の形に光るネオンを眺めた。いつ見ても景気が良さそう。ブランド店だらけの街の必然だ。

その一面に、ひっそりと地獄がある。入社して一年半で先輩社員が全員辞めるような、残業代ゼロの地獄だ。

デスクに戻り、足元に置いた鞆から、折り畳んだA4の紙を取り出す。パソコンのメール作成画面を出して、紙に書いてきた文面を打ち込む。キーボードがカタカタ鳴る音が、やけに大きく響く。

件名…退職のご挨拶

お疲れ様です。佐伯です。

このたび、一身上の都合により一月末で退社する運びとなり、本日が最終出社日となりました。

在籍中、皆様には大変お世話になりました。

至らぬ点もあったかと思いますが、皆様からの温かいご指導やアドバイスを助けられることが多々ありました。

今後もこの会社で培った経験や知識を活かし、邁進していく所存です。

末筆ながら、皆様のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

ありがとうございます。

佐伯美冬

宛先欄に、社長、役員、社員七人のアドレスを入れ、「下書き」フォルダに保存した。

これまで辞めていった人も、ほとんどが唐突にいなくなった。管理職ポジションの社員以外は、誰かが辞めるのを最終日当日に知るのだ。社長がそうしろと言う。「業務がスムーズに回らなくなるから」という説明は単なる建前で、本音のところでは、去ってゆく社員とこれからも働く社員がやり取りする隙を与えたくないだけだ。そんなことをしても、いずれどの社員もこの会社の待遇の悪さを思い知って辞めてゆくだけなのだが。

メール画面を閉じる。息を吐く。高校時代のマラソン大会で、角を曲がってゴールまでの一直線が見えた瞬間に漏れたのと同じ、絞り出すよ

うな溜め息。小さく頷いて、パソコンの電源を落とす。

デスクの真ん中の引き出しからティーバッグとマグカップを取り出して、キッチンのお湯で紅茶を淹れた。熱いアールグレイを一口だけ飲んで、マグカップをデスクに置き、一番下の引き出しを開けた。中に詰まっている書類を全部、床に敷かれたオフィス用カーペットの上に放り出す。これまで私が翻訳をチェックしてきた英文と和文。中には客先の、外部に出せない情報を含んでいるものもある。ここを出る前に、全部処分しておくなくてはならない。他の誰かがシュレッダーを使う心配のないこの時間に、作業を終わらせたかった。

書類を一束、拾い上げる。部屋の隅に佇むシュレッダーの前まで行き、電源を入れた。スイッチに点った緑の光と機械の低い唸りを確認して、紙投入口に書類を二、三枚ずつ差し込む。唸りが、細断の音に変わった。

ざざざざざざざざ ざざざざざざざざ

紙束から三枚ほどを掴み取った時、下から現れた紙に赤字で書き込んだある汚い字に、ふと目が留まった。

『子ども』

その瞬間、記憶が溢れ出した。

~~~~~

朝。出社して、前日からやっていた翻訳チェックの最終確認をし、コーディネーターの飯泉さんに報告する。株式会社キンイツの、A4半ページ弱の小さい案件。納品期限はその日の午前中。

説明を終えて席に戻った時、後ろで飯泉さんが、あ、と声を上げた。彼女は隣の席の、天木さんに話しかけた。飯泉さんは一カ月ほど前に中途採用で入社した三十歳前後の女性で、入社三年目で年の近い天木さんが指導役に任命された。とは言っても、ここに来る前は別の翻訳会社で働いていた飯泉さんは、ほぼ即戦力だった。二人とも、社会人経験ゼロで入社した私に温かく接してくれた。女性で、いくつかの会社で実務経験を積んできた二人が、出会って日が浅いのにも合った様子で働いている光景がまばゆかった。

——これ、洪瀬さんもチェックするって言ったやつですね……。

社長の洪瀬さんのデスクは空っぽだ。朝に出社するなり、客先への挨拶があると言いついて残して出かけた。確か、三時まで戻らないという話だった。

——あー、昨日いきなり思い付きで「翻訳の品質管理ができてるか確認する」とか言ってたやつかー。でも飯泉さん、昨日、期限は今朝までってちゃんと伝えてたよね。

——はい。でも昨日のうちに、チェック結果もらっとくべきでした。客先に行くっていう話を聞いたのが今朝だったので、そこまで気が回らなくて……。

——それは飯泉さんのせいじゃないでしょ、洪瀬さんもスケジュールを伝えてなかったわけだから。携帯メールに「可能ならチェック結果を十一時までに送ってください」って一報入れて、来なかったら現状のやつ納品しちゃっていいよ。

——じゃあ、そうします。そんな大きい案件でもないですしね。

——うん、佐伯さんが見て、納品前に飯泉さんもさらっと確認すれば大丈夫でしょう。二人ともTOEIC900あるんだし。個人的には携帯へのメールも別に必要ないと思うけど……一応ね。

そんなやり取りが聞こえてしばらくすると、飯泉さんが洪瀬さんの携帯アドレス宛に送ったメールが、私のパソコンにもCCで送られてきた。結局、十一時になっても、返信は来なかった。

正午を回る頃、飯泉さんのキンイツへの納品メールが転送されてきたのを確認して、この件は片付いたと思った。

わわわわわわわわ わわわわわわわわ

夕方。洪瀬さんが不意に、飯泉さんに話しかけた。

——あのさあ、キンイツの和訳、もう送っちゃったの？

——はい、今日のお昼が期限だったので。

——僕、チェックするって言ったじゃない。

——あの、今朝、チェック結果があれば送付をお願いしますと、携帯メールの方にご連絡したんですが、返信がなかったの……。私もキンイツさんに送る前にざっと見て、抜けもなかったですし、問題ないと判断しました……。

キャリアがあるとは言え、入社一カ月の新人である飯泉さんの声は、弱々しかった。

——いや、でも僕はさ、朝から客先に行ってたわけだから、メールなんてすぐ見られないわけ。昨日までに見てほしいって言ってもらわないと。

——はい、それは、申し訳ないです……。

——でも、洪瀬さんも、今日三時まで外出だってこと、昨日伝えてなかったですよね。

天木さんが割って入った。

——飯泉さんは洪瀬さんが午前中オフィスにいるって思ってたんだから、仕方ないですよ。金子さんがいた頃みたいに、全員ホワイトボードにその週の外出予定を書いておく仕組みでもあれば、みんな事前に確認できますけど。

——金子は関係ないだろう!!

洪瀬さんの怒鳴り声が響き渡った。空気が凍りつく。会話も、パソコンのキーボードを叩く音も、ぴたりと止んだ。

——スケジュールがクラウドで管理できる時代に、ホワイトボードに手書きなんて馬鹿馬鹿しいんだよ!! だいたい金子なんて、無駄にルールばかり作って柔軟性のない奴だったじゃないか、もっと早くいなくなるべきだったんだ。

——ただね、現にこうして、スケジュールが共有されなかったことで行き違いが生じてるじゃないですか。クラウドでスケジュール管理する話も、具体的に動いてませんし。

天木さんは怯まず、言い返す。静かな声の奥に、怒りが滲んでいる。

——第一、天木さんは関係ないでしょ。今回のミスをどう防ぐかは、飯泉さんと僕が考えればいい話なんだ、首を突っ込まないでもらいたいっ。

——ミスって呼ぶほどのことが起きてるとは思えないですけどね。

納品が遅れたり、誤訳や品質上の問題が見つかったわけでもないのに。

——品質とかは、どうでもいいんだよ！ 上司に確認を取るっていう所定のプロセスが、できてないって話なんだ、これは。

品質とかは、どうでもいい——。胸の奥に、どさっと砂袋を積まれたようだった。辞書を引いて、グーグルで何十件も用例を調べて、間違いがないか確認している私たちの、小さな積み重ねを、全否定された気がした。

呼吸が浅くなり、両腕が強張る。仕事に、戻らなきゃ。何度か瞬きをして、パソコンの画面に意識を集中させ、英訳の続きに取り掛かる

うとした。

Our Latin America branch  
starteaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

が、勝手に連打されていた。キーボードに視線を移す。左手の指が、キーを押し続けていた。指を離そうとしても、身体が言うことを聞かない。画面を埋め尽くす勢いで増殖する **g** を、成す術もなく見つめた。口論は、まだ続いている。

ここは、大学生時代の就職活動で七〇社近くに落とされた私が、一年後に第二新卒として二度目の挑戦をして、やっと就職した会社。私は、こんなところでは、働けない。

ぎざぎざぎざぎざ

夕方。胸の高さまで伸びた草を、必死でかき分ける。

この辺りだったはずだ。私の、セーラームーンカードが散らばったのは。





られた目の奥が、黒曜石のような光を湛えている。どうだ。言い逃れなんてできないだろう。お前の能力なんて、この程度なんだよ。自信に満ちた、有無を言わさぬ光。

——はい。すみません。

とりあえず、そう返した。また修羅場になるのは嫌だ。

——ま、今回はそんなに深刻なミスではないけどね。佐伯さんはほら、詰めが甘いところ、あるから。よく調べるようにね。

満足げに去ってゆく洪瀬さんの背中を、感情を無にして見送る。黒いタートルネックセーターにジーンズ、冬の定番スタイルだ。——ステイブ・ジヨブズのつもりなんだろうね。それにしても、セーターのサイズ大きすぎですよ。絶対、バブル時代のシルエットだよ。——去年の冬、天木さんと飯泉さんが残業中に行っていた会話を思い出す。景気のいい時に大企業に就職して、俺はできる人間って勘違いしちゃったんだよ。自分のTOEICスコア絶対公表しないし、経営だって、金子さん抜けたら何もできないくせに——。

手元に残された紙の上で、赤い「子ども」が、嘲るように私を見上げていてる。

チェックの時、私はキンイツのウェブサイトまで行って、この和訳

が載る予定のページにある過去の記事と表記が合うように「子供」に直した。キンイツから来た翻訳依頼のメールに「こちらの弊社ウェブサイトを参考にしてください」と書いてあったから。

ざっ ざざざざざっ ざざざざざざっ

詰めが甘いのはお前だよ。

ざざざざざざっ ざざざざっ

でも、仕方ない。

私が、まともな会社に雇ってもらえる人間だったらよかった、というだけの話だ。

ざっ ざざざざ ざざざざざざざ ざざざざ

赤い字が、投入口にゆっくりと吸い込まれてゆく。目を閉じて、機械の奥で刃物が触れ合う音と、紙が切り刻まれる音に耳を澄ます。やがて

シユレッターは仕事を終え、辺りはしんと静まり返った。目を開ける。ここにはもう、飯泉さんの席も、天木さんの席もない。

カーペットにしゃがみ込んで、次の紙束を掴む。紙投入口に書類を二、三枚ずつ差し込む。紙は吸い込まれ、刻まれてゆく。

紙束の厚みが半分ぐらいになった時、書類に印刷された字に、ふと目が留まる。

『タカラIRパブリッシング』

その瞬間、別の記憶が溢れ出した。

~~~~~

昼。土曜日。雑踏の中を、待ち合わせ場所まで急ぐ。

大学時代の友達、郁子と純ちゃんと一緒に、美術館に行く約束をしていた。

二人と出会ったのは、旅行サークルの新生歓迎会だった。飲み会が多く、本当に旅行好きな人はここにいないと悟って一カ月で辞めた後も、学部が同じだった二人とは時々ご飯を食べた。授業のノート

を貸す代わりに、奢ってもらうことが多かった。

まだ四月中旬なのに、連休が来たような強い日差しが降り注ぐ中を小走りで進んでいたら、不意に立ち眩みがした。前の日は、十一時まで残業していた。

その土曜日も、私以外の翻訳チェック担当者三人は入社していた。私だけ、家に仕事を持ち帰った。

頭はうつすらと罪悪感に覆われている。本当は、こんなところに、いるべきじゃない。

~~~~~

集合場所で二人と落ち合い、東京ステーションギャラリーで北欧のクラフトデザイン展を観て、このエリアで働いている純ちゃんおすすめのイタリアンレストランに向かう。店内に人工の滝があり、都会の喧騒を忘れられるらしい。純ちゃんの後について食べ物屋の立ち並ぶ通りを歩き、地下へと伸びる階段を降りると、開いたドアの向こうの待機スペースに、小綺麗な服装のカップルが立っていた。その脇の椅子には、中年女性四人組が座っていた。



もう会社の話題から離れてほしかった。私は純ちゃんの方を見ながら、口を開く。

——駿介さんとはどうなの、最近。

——聞いてよ。

純ちゃんが、猫の絵が描かれた薄ピンクのスマホケースを取り出す。画面を高速でスワイプしてから、テーブルの中央に置いた。ラメ入りのマニキュアでコーティングされた純ちゃんの爪が、魚の鱗のように光を湛えていた。

表示されているのは、ツイッターの画面だった。「shunnn」のツイートが並んだ中に、赤ら顔の男三人が変顔をしている写真がある。肩を組んだ状態で、右端の男がスマートフォンを手に持って撮影したらしく、三人の顔は画面からはみ出しそうな大写しだ。写真の上には「金曜しごおわ↓地元の温泉来た♫ 男の友情」という言葉が添えられていた。画面をスクロールすると、浴衣姿で一升瓶を抱きしめている男の写真も出てきた。

——この日、私とデートの約束してたのに、男友達に呼び出されてドタキャンしたんだよ。

——え、ひどくない？

——でしょ？ しかも「実家の親に話があるって言われた」って嘘つ

いたんだよ。家族のことで大事な話があるんなら仕方ないって思ってたOKしたのに、実際は地元の友達と遊んだだけ。

——しかも、自分から、嘘がバレるようなツイートしてるってことだよね。

——そう！ほんと無神経だよね。嘘つくなら最後までバレないようにしてっって感じ。「この日しか空いてない」って言われたから、私は歯医者とかヨガの予約キャンセルしたのにさ……。これまで上司との付き合いとかを理由にドタキャンされたのも、本当は男友達と遊ぶためだったのかなって……。

——確かに、こんな写真見ちゃうと、もう信じられなくなるよね。

——なんか男って、突然、「これから集まるうぜ！」みたいな多くない？ 無計画なのがカッコいい、乗ってこない奴は仲間じゃない、みたいな。

——ほんとそれ。最初は、駿さんって友達が多くて人望があるんだなって思ってたけど、そのために私のこと犠牲にするって判ったら、もう嫌になってきちゃったな。

私はshunnnのツイートを見つめていた。写真が投稿されたのは、

四月頭の週末。私は、休日出勤していた。午後八時まで、タカラIR  
パブリッシングの翻訳チェックだった。

~~~~~

駿介さんが純ちゃんを裏切って地元の男友達と騒げるのも、純ちゃん  
が気持ち踏みにじられて傷つくことができるのも、二人が土  
日に会社に行かなくていいからなんだ。

~~~~~

——トイレ行ってくるね。

私は席を立った。

お洒落な店だった。シックな間接照明、グラスに入った水やビール  
の泡、オリーブオイルを纏ったトマトやチーズ、肉汁を湛えたステー  
キ、銀色のフォークやナイフやスプーンが、あちこちのテーブルから  
絶え間なく光を放つ。四方八方から、会話。笑い声。グラスがぶつか  
り、カトラリーが触れ合い、音と光があちこちで火花のように弾け

る。

子供の頃、プラネタリウムで見た宇宙の映像のようだった。塵とガ  
スから星が生まれ、輝き、やがて爆発や冷却によって死を迎え、また  
塵とガスとなつて漂う……夜空の彼方には、星々の誕生と燃焼と死  
の、絶え間ない物語があるのです……。トイレの表示を指してふわ  
ふわ歩きながら、悟った。

光っていない。

この銀河で、私だけが。

身体の奥に、真っ黒な静寂が横たわっている。音も、光も、一瞬で  
呑み込む静寂。

~~~~~

河原を、風が吹き渡る。煽られた髪が、視界を斜めに遮った。草を  
かき分けていた両手を離し、顔に張り付いた髪を剥がす。

地面から目を上げた拍子に、水面の照り返しが目に飛び込んでき  
た。鉄橋のアーチすれすれに輝く西日が、辺り一面を橙に染めてい  
る。

——こんなに探しても見つからないんだからさ、きっと川に落ちちゃったんだよ。

ゆみちゃんの甲高い声が響く。

——みさちゃんもさ、そう思うでしょ？

——う、うん、そうだね。

みさちゃんが、か細い声で答える。口許が小さく動いた後、への字に結ばれた。顔は伏せられていて、目元は見えない。

——だってさ。みふゆちゃん、どうする？

ゆみちゃんが、私の顔を凝視する。眉間にしわを寄せて、目を細めて。長いまつ毛に縁取られた眼球が、黒曜石のように光る。お前には最初から選択肢なんかないんだよ。有無を言わさぬ光。

——じゃあ……探すの、もう終わりにする。ありがと、手伝ってくれて。

しんみりしないように、声を張った。

——もう、いいの？

みさちゃんが、消え入りそうな声で言う。

——うん。もう、帰ろっ。

大きく頷きながらそう言って、私は唇を噛む。

——じゃ、帰ろっか。

ゆみちゃんは、土手の石段を目指して、さっさと歩き始めた。いつもは日が沈んでも、まだ平気だよと遊んでいるのに。

風が吹いた。冷やされた首筋の汗が、不意打ちのように体温を奪う。

ざざざざざつ　ざざざざつ

——ただいま。

お母さんが目を丸くする。

——早かったじゃない。

——仕事、あるから……。

部屋のパソコンを立ち上げる。会社から持ち帰ったフラッシュメモリを、本体に挿し込む。ファイル名一覧の中の「通知」タカラIR」をダブルクリックすると、膨大な変更履歴が表示されて真っ赤になったワードファイルが現れる。用語集と申し送りを作るため、エクセルファイルも二つ開く。机の上に電子辞書も開く。

夕飯を挟んで、またパソコンの前に戻る。ワードファイルを直し、エクセル表を埋める。英訳が妥当か、グーグルを開いて調べる。字で

埋め尽くされた画面に、さらに字を打ち込む。食後の眠気が襲ってくる。顔を洗って、台所で出廻らしのお茶を飲んで、また字だらけの画面の前に座る。こめかみが、割れるように痛み出す。

何とか作業の終わりが見えてきて、ファイルを保存して閉じる。パソコンを落とす前にメールを開くと、会社から新しいデータが二つ添付されたメールが来ていた。全身から血の気が引いてゆく。

ピッ ピッピッ ピッピッ

目覚ましの音。瞼を開けるより先に、目の奥に鈍痛が走る。

首筋が硬くて、冷たい。変な汗が、じつとりとパジャマに纏わりつく。

疲れた。でも、あと二つ、終わらせないと。自分は使えない人間なんかじゃないって、認めさせないと。

古傷が開くように、就職活動をしていた頃の虚無感が襲ってきた。内定を貰えずに卒業してから、翻訳の専門学校に一年通って、勉強して、履歴書に「TOEIC…920点」と書けるようになって、正社員になって、解放されたと思っていたのに。

納期までに仕事を終わらせることができなかつたら、私はやっぱり使えない奴だったことになってしまふ。ただでさえ、新卒で大企業に入った純ちゃんや郁子より、一年遅れているのに。

胸が、ぎゅつと潰れる感覚があった。口から、けほん、と咳がこぼれる。

ピーーーーー

我に返ると、シュレッダーのランプが赤く点滅している。投入口からは、途中まで呑み込まれた書類がはみ出ている。

慌てて停止ボタンを押す。中に屑が溜まりすぎて、これ以上の細断ができなくなっていた。

カーペットに視線を移す。残りの紙は、数枚だけだった。

「……あとは明日やればいいか」

紙を拾い上げ、束にした。デスクの端に束を置いて、冷めた紅茶をすすする。あの四月の土曜日の余韻が、まだ胸に燻っている。

床の鞆を漁り、飾り気のないベージュのスマホケースを取り出す。留守電の、一二月二六日の記録をタップして、耳に当てた。

「ホシカワ印刷人事部のミヤシタです、佐伯美冬さんの携帯電話で宜しいでしょうか。先日の面接の件でお電話いたしました、折り返しご連絡をお願いします……」

はきはきした男の声が、肺の隙間を心地よく通り抜ける。去年最後の出社日、昼の休憩で会社を出た時にこの留守電を聞いて、すぐ電話をした。同じ声で採用を告げられて、膝から崩れ落ちそうになった。思い返しているうちに、心が徐々に凧いでゆく。

マグカップを置き、シュレッダーの蓋を開けた。引き出しの中で盛り上がったシュレッダー屑を手で潰し、再び切断ボタンを押すと、はみ出していた書類がじりじりと吸い込まれ、刻まれていった。

もう一度蓋を開けて、屑で膨れ上がったビニール袋を引っ張り出す。口を縛ろうとして袋の両端を持ち上げた瞬間、白と黒の屑の隙間に、さつと赤がよぎった。

外に出ると、きんと冷えた空気が全身を包んだ。シュレッダー屑の入ったビニール袋を脇に置いて、首のマフラーをきつく巻き直す。

岸本さんに言われた通り、ドアを施錠。この鍵、明日返さなきゃな。掌のひやりとした感触にそんなことを思いながら、鞆の内ポケットにしまう。

エレベーターで一階に降り、玄関ホールの奥、大理石の壁とほとんど一体化している扉を開ける。コンクリート打ちっ放しの細長い暗闇に、水色の蓋つきポリバケツや膨らんだゴミ袋、黄色いビールケースなどが、静かに並んでいる。電気を点けても、天井の蛍光灯の光は弱々しい。

燃えるゴミ置き場は一番奥だ。一步踏み出す度に、カッン、と靴音が響く。

突然、左足が何かに引っかかった。次の瞬間、私は前のめりに倒れていた。鞆とゴミ袋が手から離れ、床の上にはばらばらと転がった。

「……う……」  
左足の先で、どさりと雑誌の束が倒れた。とっさに床に着いた両手が、



ひりひりと熱を持ち始めている。しばらく放心した後、私は立ち上がった。

雑誌の束を元の場所に戻そうと、紐を掴む。ふと、週刊誌の表紙に小さく印刷された、女性の顔写真と目が合った。優しく笑いかける、アーモンド形の目。すぐ脇に、黒いゴシック体の見出しが躍っていた。

『過労自殺・深瀬静香さん母 涙の独占告白』  
目を逸らす。でも記憶は溢れる。

咳が止まらない。視界が涙で滲む。パソコンの画面に表示された、転職サイトの検索ページが霞んでゆく。

椅子から降りて、床にしゃがみ込む。喉が、私の意思と関係なく、胃の中身を全部吐き出そうとするかのように痙攣する。きつとこの身体は死にたがってる。

お母さんが部屋に駆け込んできて、私の脇にしゃがむ。背中に、小さな手の感触がある。発作が収まるまで、手は背中をさすり続けた。

——昼ご飯の時に、咳止め、飲んだんだけど。  
肩で息をしながら、お母さんに伝える。

——効果が切れてきちゃったかしらね。夕飯はお父さんがお風呂か

ら出た後になるけど、食べられそう？

——うん、少しなら。

脇のソファアーに腰を下ろす。こめかみに鈍痛。もう求人を見る作業は打ち切りだ。

——繁忙期になる前に、会社、辞めなさいね。正社員のいい仕事が見つからなくても、辞めていいからね。

お母さんが、静かに言った。

——また土日まであんなに仕事させられるの、見たくないから……。

今、忙しい中で転職活動しなきゃいけないくて、辛いのは判るけど。

——うん。

夕飯、おでん。柔らかく煮た大根が優しい。

テレビから流れる、どこかの大雪の映像。昆布だしのとろみが、舌と食道と首筋にじんわり染み入る。

——美冬は、転職先、決まったのか!!

父親の声。ただでさえ大きい声が、ビールのせいで増幅されている。

——まだ……。

——転職するって言ってから、もう一カ月経つよな？ まだ決まん

ねえのか!!

——なかなかね、条件に合うところがないのよ。面接に行ってみたら、あなたが考えているほど英語を使う仕事はありませんって言われたりしたんでしょ?

——うん。

お母さんのフォローに安堵する。私には、すんなりいかない転職活動をはきはき説明する気力など残っていない。

——年内にカタが付きゃいいけどよ。来週クリスマスだろ? もうそろそろ今年終わるで。

——でも、焦って変なところに入っちゃったら、また転職しなきゃいけないじゃない。時間かけてでも、ちゃんと探した方がいいわよ。

美冬は忙しい中でも毎日求人情報チェックしてるし、繁忙期になる前に決まればいいわよね。

私は頷き、はんぺんを口に運ぶ。温かい。柔らかい。味はしない。

——ま、時期はともかく、次が決まってねえのに辞めるってのは社会人として恥だからな。決まらなきゃ、もう一度、繁忙期やるんだな。

食道が、きゅっと縮むのを感じた。右の二の腕が勝手に震えて、気

付くと持っていたはずの箸が、ばらばらと床に落ちていた。

——ちよっと、何言ってるの、お父さん。

お母さんの声がする。二人の表情は判らない。顔を上げる力すら残っていない。

——別に、何も間違ったこと、言っただけじゃねえか。次の仕事も決めねえで、ただ会社辞めるような根性ない奴、社会で誰が信用するってんだ。

会話が途切れる。女性ニュースキャスターの涼しげな声が、隙間風のように、食卓の上を吹き渡る。

——……フカセシズカさんの遺族は、フカセさんの自殺の原因が過労や上司からのパワハラにあるとして、会社に対し訴えを起しています。

テレビの画面に、若い女性の顔写真が映し出される。丸みのある顔、アーモンド形の優しげな二重の目、口許には柔らかい笑み。ゆるく巻かれた、セミロングの髪。綺麗な人。「自殺」という言葉と無縁に思えるほどに。

——はっ、くだらねえ。

父親が、テレビに向かって毒づく。

——仕事が辛いなんて理由でよお、何も死ぬこたあねえじゃねえ。心が弱いんだよ！ どうせ机に向かって勉強ばっかしてきたんだろ。苦勞を知らねえんだよ！ こんな奴のことをわざわざ時間を使って報道するテレビも馬鹿だよなあ、俺に言わせりゃ。

——お箸、洗ってくる。

拾った箸を握って、私はテーブルに背を向ける。流しの前まで来た瞬間、喉が痙攣した。頭をシンクに突っ込むようにして、咳込む。箸が、また床に落ちる。

靴の中を漁り、紙マスクを取り出して、鼻と口を覆った。小さな呼吸を繰り返しながら、ダウンジャケットの上から胸の辺りをさすった。

転がったシュレッダー屑の袋を拾って、可燃ごみ置き場の、青いポリバケツの中に落とした。

もう、この場所に来ることもないだろう。

地下鉄のホームは、埃っぽい温かさで満たされている。あのオフィスを去る目途が立った今は、駅も、目に映る人や物も、それ以上の意味を持たずに存在していた。

ほんの二週間前までは、ホーム際の薄汚れた点字ブロックのレモンイエローが痛かった。その数歩先の暗闇が、底無しに黒かった。向かい側のホームを行き来する人の真下にある闇を眺めていると、自然と世界の囁きが聞こえてきた。ちょっと勇気を出して跳べば、全部終わるんだよ。

——苦勞を知らねえんだよ！

私が飛び込んだら、父親は、私にも苦勞があったと、認めてくれるのかな。それなら、私は、あの闇に向かって、全力で跳べる。さして美しくもない、疲れ切った肉体と引き換えに、この苦しみを証明できるなら。所詮、光の宿らない身体だから。純ちゃんや郁子のものとは違うから。消滅したって、惜しくはない。爆発する星みたいに、律儀に歩んできた生の痕跡を飛び散らせて、レールと車輪と誰かの網膜に最後の色彩と光沢を刻みつけて、塵とガスに戻ってゆくんだ。

でも、そこまでしても、父親が、同じ態度だったら——夢がないな。死ぬことにさえ、夢が必要だなんてね。

結論に辿り着くより、地下鉄がホームに入ってくる方が早かった。いつもの。

「……電車が参ります、黄色い点字ブロックの内側に下がってお待ちください」

指先で、鞆の中のスマートフォンをそっと撫でる。

私には、次の場所が用意されている。

あの日、電話が来たのだから。

暖房の熱気が籠った車内を、ひしめくウールやダウンやカシミヤをかき分けて進み、吊革を掴んだ。窓に映る自分の疲れた顔と見つめ合いながら、何駅かやり過ごす。目の前の酒臭い大学生風の男の子が席を立ったので、座ることができた。

座席に背中を預け、車体の揺れに身を任せる。たたん。たたん。リズムにあやされるように、酷使した両目が自然と閉じてゆく。意識が、熱

い紅茶に放り込まれた角砂糖のように、形を失くしてゆく。

たたん、たたん、と非常階段が上がっていた。

外に面した階段は、マンシヨンの壁をくねくねと這うように取り付けられていて、一段踏むたびに薄っぺらい音を立てる。前に行くお母さんのスニーカーと、揺れるスーパールのレジ袋が見える。その向こうには、日暮れ直後の、青に近い紺色の空。荷物がそれほど多くない日は、マンシヨンの中のエレベーターを使わずに、自転車置き場に近い非常階段を上るのだ。

お母さんに追い着きたくて、一段飛ばしに切り替える。三階の踊り場が見えた瞬間、勢いよく出した左足の爪先が、手前の段に引っかかった。声を上げる暇もなく、身体は前のめりに倒れた。

どっ、という鈍い音に、お母さんが振り返る。レジ袋を脇に置いて、段を駆け下りて傍らに屈んだ。

——大丈夫っ。

打った膝と手のひらが、じりじりと痛んでいた。切り傷はなく、痣で済む程度の怪我。それなのに、両目から勝手に涙が溢れてくる。

——痛い？ 歩ける？

う、う、と声を上げて、段の端にうずくまって泣いた。ゆみちゃん  
の目と、河原の石段をさつきと上がってゆく後ろ姿が、瞼の奥にちら  
ついた。

キラカード。私のキラカード。

お母さんの手が、すつと背中に回った。

ひとしきり泣いて、私はゆっくり立ち上がった。お母さんも、レジ  
袋を持ち上げて歩き出す。

ドアの前で、二人で立ち止まる。靴から鍵を出すお母さんの横顔に、  
ぼろりと言葉を発してしまった。

——今日ね、ひろきくん、私が持ってたセーラーズカード投げ  
られて、一枚なくなっちゃったんだ。

——あら、そうなの？ ひろきくん、ちょっと乱暴よねえ。

——うん……。カード、草の中に投げられちゃって、みんなで探した  
んだけど、なくて、遅くなっちゃうから、もう帰ろうってなって。

——そう。残念だったわね。

お母さんが顔をこちらに向けて、小さく肩をすくめながらドアを開  
けた。しんみりさせてしまったことが悲しくて、私は忙しなく靴を脱  
ぎ、綺麗に揃えた。

——明日の朝、もう一度探しに行ってみたら？ 土曜日だし。

廊下に立っているお母さんを仰ぎ見た。身体の輪郭が、黄色い電灯  
の光に、柔らかく溶けていた。見惚れながら、うん、と小さく返事を  
する。ジンジャーエールを勢いよく飲んだ後のように、胸の奥がひり  
つく。少しだけ甘い。

キラカードは、ゆみちゃんが盗ったんだと思う。

もう一度探したって、出てこないと思う。

でも、お母さんは、探しても無駄だなんて言わないんだ。

がくん、と頭が揺れ、衝撃で目を醒ます。

顔を上げると、電車はいつの間にか地上に出ていた。窓の外、進行方  
向の側に、駅直結のショッピングセンターの壁面がぬつと現れ、みるみ  
る大きくなってゆく。ここは——まだ川の手前だ。乗り過ぎしていない  
ことに安堵する。

電車は速度を落としながら建物の脇腹に吸い込まれ、だだっ広いホー  
ムに停まった。乗客の半分近くがホームにばらばらと降り、別の人々が  
ぼつりぼつりと乗ってくる。私が降りる駅まで、まだ十駅近くあった。

身軽になった電車がゆるやかに動き出し、車体は再び、たたん、たたんとリズムを刻み始めた。窓越しの闇に浮かぶビルやマンションや自販機の灯りが、ただのカラフルな光の帯になり、やがて瞼の裏の残像になる。

たたん、たたん、と非常階段を上がっていた。一人だった。

知らないうちに、ずいぶん高いところまで来ていた。うちのマンションではなく、何十階もあるオフィスビルのようなだった。日は完全に落ち、頭上には月も星もない。

外に面した階段は、建物の壁をくねくねと這うように取り付けられていて、一段踏むたびに薄っぺらい音を立てる。たたん、という私の足音から一拍遅れて、たたん、と別の足音が降ってきた。追いつかなきゃ、と私は思う。

たた、たん。私の足音と、上から聞こえる誰かの足音が、ごくたまに重なる。段と段の隙間から、下の道に点在する街灯の黄色い光が時折覗いて、フラットパンプスの足元をわずかに照らしていた。

踊り場まで辿り着いて見渡すと、眼下にはどこか見覚えのあるオフィス街が広がっていた。このビルは周囲のビルより高さがあるらしく、

通りを挟んだビルの四角い屋上が、どれも殺風景な灰色の顔で私を見上げていた。

向きを変えて段に足をかけた時、視界の端で白いものが揺れた。隣のビルの屋上の隅に、白い花だけで作られた花束が置いてあり、ひときわ大きな百合が微風に煽られて、小刻みに震えていた。花束の向こうに、顔写真の入った額縁が飾られている。髪の毛の長い女の人、アーモンド形の目——そうだ、あの人、ここから飛び降りたんだ。

手すりを握り直し、先を急ぐ。てっぺんまで上りきり、屋上に降り立って目を凝らすと、反対側のへりに屈んでいる人影が見えた。

息を潜めて見守っていると、影が乳白色の丸いものを頭上に高く掲げた。闇夜に白く浮かび上がったそれは、私が捨ててきたシュレツダー屑の袋だった。結び目は、解かれているようだ。

次の瞬間、袋がぶると振られた。無数の白いシュレツダー屑が、真っ黒な空に舞い上がる。夜風に煽られ、はらはら流れる。

そうか。仕事納めだもんね。

あの屑の最後の一かけらが、オフィス街のコンクリートに舞い降りるまで見届けたい。私は走り出した。不意に、こっん、と何かにつまづいた。

全身が、ぎゅつと強張った。思わず目を見開く。

私は、電車の座席に座って、鞆に突っ伏していた。乗っていたはずの客は、一人もいなくなっている。開いたドアから流れ込んだ冷気が、足元をさつと撫でた。

顔を上げ、息を呑んだ。

窓ガラス越しの闇一面に、粉雪が舞っていた。

私は何度か瞬きをする。目を開けても、外は雪。ここは、どこなんだろう。オフィス街の夢が、まだ続いているのか。夢の残像が、現実に紛れ込んできたのか。

窓の外を、ダウンジャケットを着た会社員風の男が、小走りで横切っていた。男と逆の方向から歩いてきた車掌が、車内の私に気付いて、差していたビニール傘をひよいと傾けてこちらを見た。彼の表情で、ここが終点なのだと悟る。慌てて鞆を掴み、ホームに駆け降りた。

舞い落ちる粉雪の中に、私は一人で立っていた。

湿ったマスクを外して、ポケットにしまった。口を小さく開け、白いちらつきに見入った。疲れた目に、夜の冷気が優しくかった。

「……ブエノスアイレスだ」

雪の一粒一粒が、カーテンコールで舞台に降り注ぐ紙吹雪のようで、気付いたら背筋が伸びていた。首をぐつと傾けて頭上を仰ぐと、まるで自分の身体が上昇してゆくような錯覚を覚えて、足元がふわふわとおぼつかなくなった。後ろで、無人になった電車の走り去る音がする。それはだんだん小さくなり、やがて何も聞こえなくなった。

静寂と雪だけの世界に、私は長いこと佇んでいた。上り電車は、いつ来るのだろうか。視線をホームに戻しかけた時、仄暗い線路沿いの道に、白いものが揺れた。線路と道を隔てる柵の向こう、電柱の根元に、小さな花束が括りつけられていた。供えられてから時間が経っているらしく、花の大半は茶色く乾いていた。一番大きな百合の花だけが白い色を留め、静かに呼吸するように、そこにあった。白い、というより、色がない、に近いだろうか。神様が、そこだけ色を塗り忘れたような、この世界のあらゆる色彩から見放されたような。

いつの間にか、花卉の呼吸と同じリズムで息をしていた。

吐いて、吸うごとに、頭の中にドライアイスの煙が満ちてゆくような心地がした。思考が、徐々に、霞んでゆく。

どうして、電車を待っているのだろう。

のまま 戻らなくなったっていいんだ。 労働と 百合が、呼吸した。

消耗と 羨望と 雑音と たかが知れ

ている報酬と 片付かない感情で 溢

れた 世界から 永久に離れる こ

とだって できる。 ここに い

れば よけいな きど あいらくは

そのうち こおりついて き

のうしなく なる だろう。 ときはなた

とんで。 つかれない。

れる。 なければ。

いたくない。

からだか つかれない。

ちりと がすに

もどってゆくんだ。

だ い じ よ う ぶ。

一步、踏み出す。

間を隔てているのは、線路際の柵と、平行に伸びたレール。邪魔な鞆をホームに置いたため、そっと屈んだ。

右手を、レザーの持ち手から放そうとした瞬間、ヴツ、とくぐもつた音がして、指先を小さな振動が伝った。

ひつ、喉が悲鳴を上げて、右手が鞆を放り投げた。横向きに落ちた鞆の口から、ベージュのスマホケースが飛び出した。ヴーツ、ヴーツと震えながら、点字ブロックの上を這う。

スマホケースを拾おうとしゃがんだ私の脇を、ガスタンク車が猛スピードで駆け抜けていった。夜中にしか走らない鉛色の車両は、目を上げた時にはもうホームの果てを離れていた。

お母さんの名前が表示されたディスプレイの、通話ボタンをタップする。どうしたの？ と半ば叱るような声が、スピーカーから漏れてきた。

「ごめん、乗り過ぎしちゃって」  
説明しながら、切羽詰まった口調がおかしくて、少し笑ってしまった。

ちよっと寝過ぎただけなのに。  
「うん、駅からはタクシーで帰るよ」



帰るよ、の最後は、アナウンスの声に掻き消された。電車が来たことを早口で伝え、電話を切る。

「四番線、間もなく電車が到着いたしますー」

鞆を拾い上げ、表面の雪を払っているうちに、上り線の各駅停車がホームに滑り込んできた。車窓から黄色い光がこぼれ落ち、ホームの黒い床にささやかな生気が宿った。

に輪郭を失くしていた。白い姿はどんどん小さくなり、やがて粉雪の粒に紛れて見えなくなった。

生温かい座席に身体を預け、たたん、たたん、と揺られていた。私の乗った車両の先客は、口を半開きにして眠るスーツ姿の中年サラリーマンだけだった。ジャケットの二の腕の部分がぱつんぱつんで、不自然なしわが寄っている。ショルダーバッグのストラップはぼろぼろで、靴の先端は禿げかけていた。中吊り広告には文字と色彩が踊り、うるさかった。あの駅の静寂を思い出す。どうして、引き返してしまったのだろう。

暖房の熱気に包まれてぼんやりしているうちに、電車はゆっくりと動き始めた。闇に浮かぶ電柱が、じりじりと左にずれてゆくのに気付き、慌てて窓へと駆け寄った。

百合の花は、雪交じりの雨に打たれて、水に落ちたティッシュのよう

うっかり眠らないように、わざと大きく瞬きしながら、外の闇を眺めた。街灯や、馴染みのない駅のカーブした天井や、誰も見ていないのにボタンを忙しなく光らせる自販機が、現れては流れ去ってゆく。閉じかける瞼に抗って、目をぎゅつと瞑り、開く。ぽつんと宙に浮いたパチンコ屋の看板が通り過ぎた後、不意に闇の奥行きが増し、遠くに山火事のような、横一列の不思議な揺らめきが見えた。赤く燃え上がる線の上に、同じ色の丸い光が等間隔に並んでいて、そのさらに上を、黄色いライトがすつと横切ってゆく。あれは車——橋だ。川に出たんだ。

水面が、土手に建つマンションの窓から漏れる灯りを映して、ゆらゆらと輝く。動く光と動かない光に挟まれた、真つ黒な土手を見つめた。あの辺りだった。子供の頃、キラカードを、一生懸命探したのは。見つからなくて、西日が眩しくて、そよぐ雑草が自分を嘲っている気がして。

ざざざざざざざざ ざざざざざざざざ

大きな音だった。折に触れて、思い出すほどに。

ふと、あの河原に、もう一度立ってみたくなくなった。

背が伸びて、視界を草に遮られずに遠くを見渡すことも、一人で電車に乗って鉄橋を渡ることもできる今の私に、世界はどんな表情を見せるだろう。風にそよぐ草は、同じように、うるさいだろうか。水面の光は、胸を焼くだろうか。あの頃より、もう少し優しくなっている気がする。希望的観測のような予感。

電車は鉄橋を渡りきり、大型団地の連なる一帯を、鈍行の速度で走ってゆく。グレーのドアやメーターボックスが均一に並んだ無機質な光景が途切れ、線路と垂直方向に走る細い道路と、道沿いにぼつんと立つビ

ルが見えた。流線型を描く建物の壁面には横長の窓が階数分あって、一番上の階だけ電気が点いていた。緩くカーブする輝きには、どこか見覚えがある。黒髪の中、つやつやと光沢を放つ――郁子のバレッタ。

あの日、真つ黒なヘアゴムで束ねただけの、自分の髪が恥ずかしかった。休日の朝、目を覚まして、自然とお洒落しようと思える郁子の生活が、直視できないほどに眩しかった。

明日が終わって、土曜日が来たら、バレッタを買いに出かけよう。動いた拍子に、光るものを。草の中に落ちて、見つけられるような。

電車が見慣れた駅にゆっくりと停まり、ドアが一斉に開く。ホームに降り立った瞬間、突風が吹いた。潰れたエナジードリンクの黄色い缶が、カランカランと音を立てながら、目の前を横切っていった。雪は、霧雨に変わっていた。

アナウンスと発車のベルが鳴り響くホームから、駅前のターミナルに数台停まったタクシーのランプが見える。こめかみが、きりりと痛んだ。

立ち止まり、目を瞑った。しつこく瞬く残像が、徐々に闇に吞まれてゆく。真つ暗な臉の裏側に、無意識のうちに探していた。雪が舞う終着駅のホームに満ちていた、静寂の余韻を。